

第一節 安宅彌吉

中・高校元教諭 三宅広明

はじめに

甲南女子学園の前身、甲南高等女学校が誕生したのは一九二〇（大正九）年のことでした。

学園の『創立五十周年記念誌』（一九七二年）には、「甲南高等女学校は、甲南小学校と連絡する学校として、前年開校した甲南中学校とともに、住吉村や付近に在住する関西財界人から設立の要望多く、創設首唱者安宅彌吉が中心となり、久原房之助、岩井勝次郎、伊藤忠兵衛、平生鈺三郎、田邊貞吉、その他多数の財界人の協力を得て創設したものである」と記されています。また『甲南学園の五〇年』（一九六九年）には、「一九一九（大正八）年四月二〇日の甲南中学校創立委員会の席上で、安宅彌

吉が高等女学校設立の意向を表明、大方の賛成を得た、と記されています。

つまり、学園設立の中心を担ったのが安宅彌吉であることはまちがいないさそうです。では、安宅彌吉とはどのような人物で、学園創設にどのような思いをもっていたのでしょうか。

一・学園での安宅彌吉

安宅彌吉は、設立当初は理事として、一九二六（大正二五）年からは甲南小学校、甲南中学校の理事長でもあった田邊貞吉の後をついで二代目の理事長となり、一九四六（昭和二一）年六月に病気で引退するまでの二年間甲南高等女学校を支えてきました。その彌吉について、長い間学校で身近に接した校長の



甲南女子学園所蔵の肖像画

表甚六は、「回顧三十年」（『創立三十周年記念誌』）の中で、安宅を偲ぶ文章を書いています。

先生に接していた二十三年の間に、私が最も感心していたのは、本校財団の会計元帳の収支を全く一人で記載整理せられていたことで、（中略）御本職の御仕事が多忙な上に、大阪商工会議所副会頭としての用務も絶えないのに、煩瑣な帳簿を自分で引き受けられ、二十五年の間忠実に、巧みな細字で綿密に記載せられていたので、責任感の強い方だと

思っていた^{*1}。

財団唯一の仕事としては学校の特別会計の不足を補うことであった。その補充金はどうもすれば基金を脅かす形勢になるので、それ以上の臨時支出を申出ることとは私としては甚だつらかった。然し必要上やむを得ぬものは遠慮なく相談した。先生は支出方法を案ぜられて、不足分は自分が立替えるから設備されたしとして申出を快諾せられる。（中略）私が申出たものは一々理事会に諮られず即座即決せられるのが常であった。

さりながら、借地料を決定するとか、校地移転候補地の決定とか、校地買収とか、校舎増築とかの重大事は決して専断せられず、他の理事の意見を徴せられて慎重に研究された。問題によつては理事方の意見は必ずしも一致せぬことがある

ので、事によると在^{じん}再^{ぜん}月^{げつ}日を費やすこともあった。

先生は雄弁家であった。平素学校へは度々来られなかったが、観菊会とか、運動会とか、そうした催し事のある時は繰り合せて出席せられ、卒業式には必ず臨席せられた。その時は理事長としての告辞をせられる、なかなかの名演説で長時間にわたる。（中略）軽妙な弁舌で卑近な例話を織りこんで、前後左右から卒業生の箴となることを説かれた。その流暢さには皆感心したものである。

また『創立三十周年記念誌』の座談会には、卒業生と教師から見た彌吉の印象が記されています。

「校長先生に御用がおありだったものですからちよいちよい学校へおいでになり校長室でお話なすったり、学校を歩かれたり、生徒の学習をご覧になったりして、たいへん親しみがございました。（中略）時には御冗談なども仰いましたし、まことに

寛いだ気持ちでございました。」
「この学校はあなた達の学校だ、ということをお宅さんはいつも仰いましたわ。」

学校のことが気になって、ときどき学校に顔をだしていたようです。校長らと話をして財団の会計を確かめるだけではなく、校内を歩いたり、教室に入つて授業を眺めたり、なんだか学校と関わることを楽しんでいくように感じられます。「この学校はあなた達の学校だ」といつも話していたとあります。が、表によると、これは安宅の持論で、「学校は公有物だから一個人の私すべきものではない。理事の学校だとか、安宅の学校だとかいうものがあるが間違っている。皆で学校を盛り立つべきだ」ということで、卒業式の時など保護者や卒業生、生徒が集まる場所で機会あるたびに話していたといえます。学校は公共のものであって、教職員、生徒、保護者など「皆で学校を盛り立つべきだ」と、ことあるごとに話していたというところに、彌吉の考えと学校に対する姿勢がうかがえます。

それは、甲南高等女学校の成り立ちとも関係があるように思われます。そもそも甲南学園は、阪神間の住吉村周辺に住む財界人が中心になって自分たちの子どもを通わせる学校として、甲南幼稚園、甲南小学校をつくり、その成長にもなつて甲南中学校、甲南高等女学校をつくつていきます。

つまり甲南学園は国家のエリアートを養成したり、国家の意図に沿う国民大衆を育成するための学校でも、宗教的な啓蒙を目的とする学校でもなく、自分たちの子どもを育てるための学校として作られているのです。

二・彌吉の教育観

彌吉は学校を作り、運営をしていったけれど、教育の内容や方法についての研究者でも実践者でもありませんでした。ただ実業家としての立場から、自分の経験による教育に対する感想や思いはしっかり持っていました。その彌吉が「国民教育につ

いて」という講演を一九三六（昭和一一）年にNHKの放送で行

っています^{*2}。一九三六年というと二・二六事件の起こった年であり、日本の社会全体が軍国主義に流れていった時期にあたります。

そこではまず「国民教育」のうち、六年間の義務教育課程の尋常小学校に対する私の希望として四点をあげています。

第一は、知育偏重、詰込み主義になつていて、とくに四年生以後の児童の負担が重すぎるのではないかとということ。教科書のみならずたくさんのことを無理やり詰め込んでいるのではないかと、「できるだけ大綱即ち概要に通ずる主義で、煩瑣な教育をやらぬ方がよいかと思いません」といいます。理解しているか否かにかかわらず、ただ暗記していればそれで「知識」を得たことになつていて、「国民常識」として、血となり肉となるものになつていないのではないかと、よく消化して利用のできる知識、つまりよい意味の常識となるよう教えてほしいといっています。

第二は、日本の国民は、人道徳は重んずるが、社会道

徳という点で劣っているのではないかとということ。つまり社会的礼儀と規律ないし秩序を重んずる点において欠けている所がある、この点を修身の時間だけでなく全学科、全学校を通じて指導していただきたいといっています。

第三は、「今後の日本は国防と産業の両全主義で行かねばならぬ時代ですから、小学教育においても、産業、経済に対する知識を従来よりもより多く教える必要があると思う」ということ。

その例として、アメリカの生糸の相場が信州の山奥の農家の繭の値段に影響すること、また保護貿易によってオーストラリアの羊毛が日本に來なくなると、紡績会社ではアンゴラ兎の毛で混紡をやるとういうことになり、農家でのアンゴラ兎の飼育という問題が起ることなどをあげています。そしてこのような「国際的問題に対する教育は、いまだに島国根性が抜けきらぬと言われている我が国民に対して眼を開き、遠大なる理想と

他の国民に劣らぬ気魄とを養わしめることにもなるでありましょう」といいます。

第四は、最近若者の体格低下が起こっているのは学校教育の問題ではないかということ。こどもも知育偏重、詰込み主義が問題にされ、同時に体育の授業が「競技万能」に陥っているのではないかという、「古来の武道を加味した日本人の体格に適当した運動方法を考慮し、運動が徳育の補完ともなるように心がけることはできないものではないか」と述べています。

そして尋常小学校に続く学校、つまり高等小学校、中学校については、実業教育をもう少し徹底的にやるべきだといひ、英語は会話とライティングを重視すべきだし、漢文はどうしても必要だと、語学の重要さを強調しています。

実業学校については「あまりに近視的、実利主義的な商人を作りださないように、高潔なる責任を重んずる商人として、俺は町人だ、町人道をもって誇りとするんだというような人を世に出してほしい」と

と語っています。

最後に女学校について、高等普通教育を受ける女子が多いのは慶賀すべきだとして、その教育内容に触れています。中途半端な幾何とか代数を教えるより、思考能力を養うためなら、小学校の算術のめつと進んだものを教えるほうがより実用的でよくないか、もう少しそろばんや家計簿記などを取り入れるのもよい方法。欲をいえば、物理、化学等もあまりに理論的なものよりも、できれば家事経済に直接参考になるように編成した教科書を用いてほしい、体育は程度を越さないように等々。彌吉自身、実業家としての立場からと断つたうえで、実用的な学びを通してあるべき教育を語っています。

これらの話からうかがえるのは、偉い人になるための知育偏重の教育ではなく、人として、普段の生活を生きていくための力になる教育を大切にしたいという彌吉の思いです。ただし甲南高等女学校における実際の教育については、自由主義的な表校長の教育観を信頼して全

面的に任せていたようです。そこに彌吉の器量の大きさがうかがえます。

三、彌吉の生涯

安宅彌吉は、一八七三（明治六）年四月、石川県金石町（現・金沢市）に八人兄弟の七番目として生まれます。生家は肥料商を営み、かたわら農家や商人に資金を貸して利息を得る金融も行う地域の素封家でしたが、彌吉の父、三代目又吉が仕事ひと筋に働き家を栄えさせたといいいます。一家総出で働くことが当たり前の家庭で彌吉は又吉の生き方に影響を受け、幼時から信仰心厚く育っていきます。

彌吉は小学校では算術が得意で成績優秀、石川県専門学校に入学しますが学制改革で廃校となり、新設された第四高等中学校に通うようになります。

又吉は彌吉が工科大学にすすみ、養蚕製糸の事業を起すことを願っていましたが、彌吉が一六歳の春に病で亡くなりました。

そんなころ新聞で金石出身の豪商錢屋五兵衛の伝記を読んで強く惹かれ、貿易商として日本一の富豪になることを夢見て一八八九年に上京します。たまたま新聞広告で東京高等商業学校（現・一橋大学）が学生募集をしていることを知り、仮入学から入り、ひたすら勉強に励んで本科生になります。高商時代は石川県出身学生のための寄宿舎、久徴館に入っていました、

その中に鈴木貞太郎（大拙）がいて、禪に関心を持つようになり、鎌倉の円覚寺に参禅に通うようになります。一八九五（明治二八）年に卒業し、就職は、友人の紹介で大阪の日下部商店に入ります。

日下部商店は小さな個人商店でしたが、当時大阪財界の有力者だった松本重太郎が支援していました。彌吉は就職するとすぐに香港に行き、日下部商店の香港支店（日森洋行）をまかさされ、将来の独立をめざしてひたすら働きました。一八九九年に日下部店主が亡くなり独立しようとはしますが、松本重太郎に説得されて、香港支店は日下

部商店とは別経営として彌吉が掌握し、純益の五割五分をとることで日下部商店に残ることになりました。

彌吉は、ジャワで砂糖を扱う華商建源号からの砂糖の仕入れに成功し、砂糖輸入の最大の会社であった日本精糖が扱うジャワ原糖の指定業者となり、日森洋行は軌道にのるようになったといひます。当時ジャワから直接仕入れて日本精糖に売る指定業者は三井物産とイギリスの会社しかなく、指定業者になるために、彌吉は一人で直接ジャワの建源号当主と会い、信頼を得て商談を成立させています。

ところが一九〇四年、日露戦争の勃発により株価が暴落し、彌吉の後援者でもあった松本重太郎は大打撃を受け、彼の持っていた銀行や企業が倒産、その手形を抱えていた日下部商店も倒産し、別経営であったにもかかわらず彌吉が経営していた香港支店も閉店に追い込まれます。彌吉は出資していた金を失いながら、日下部商店の整理に力を尽くしています。

このとき彌吉は結婚して子

どもが生まれたばかりの三二歳。夫人の持参金と自分のためた金四万円をもとに大阪にある自宅を店舗として「安宅商会」をスタートすることに なります。香港では「日森洋行」の名を引きつぎながら新しい仕事に取り組んでいきます。いたずらに事業を拡張せず、つねに企業体力にあわせ

た「蛙とび商法」で順調に業績を上げ、一九〇九年には資産は三五万円（現在の一〇億円以上）となりました。ところが、この年、日本精糖などが合併してできた大日本製糖が拡張路線によって破綻、その手形三六万円をもっていた安宅商会は倒産の危機に陥りました。安宅以外に手形をもっていたのは大企業と銀行ばかりで、負債を割り引いて均等に返済されたのでは立ちゆかず、彌吉は債権者会議で窮状を訴え、取引銀行の信頼によって何とか切り抜けています。

このような浮き沈みの経験から、第一次大戦の直前、戦時となれば何がおこるかかわらない、順境のときに財産を

整理しようと、当時もっていた大阪・東京・香港・大連の四店舗のうち香港と大連の店を当時の大商社鈴木商店に譲渡しています。大戦中は価格が高騰して大いにもうけましたが、事業の拡張を抑えていたためにその後の厳しい戦後恐慌を乗り切ることができたようです。

彌吉は、第一次大戦後の一九一九（大正八）年に安宅商会を株式会社で改組し、社員に株を与えています。これは当時としては珍しいことで、「経営者と社員は運命共同体でなければ事業は発展しない。共に繁栄をめざせばともに潤う」という考えによっています。儉約はするが人助けにはカネを惜しまない、「情誼に厚く周囲の人間を大事にする」人といわれていたようです。そして一九二〇年からは甲南高等女学校の設立に参画して、資金を学園に寄付するようになります。

一九二六年、安宅商会は八幡製鉄所の入札指名業者となり、以後鉄鋼業界で大きな地位を占めることとなります。その間彌

吉は、一九二二年には大阪商業会議所（現・大阪商工会議所）の副会頭に、一九三五年には会頭になり、一九三九年には勅選の貴族院議員になっています。

彌吉は、一九四二（昭和一七）年、社長を次男の重雄に譲り、翌年社名を「安宅産業」と改めました。彌吉は相談役と肩書を変えながら、実質は社長時代と変わりなく仕事をしています。が、一九四三年に脳卒中で倒れます。その闘病中に、読んだ本や古い覚書から『備忘録』をまとめていきます。

終戦の少し前、京都の円福寺に疎開してしばらくの室住まいをしますが、当時を知る仏教学者の古田紹欽は、「日々の暮しは禅僧の生活のように思えた」と述べ、この円福寺での起居が「翁の晩年の生活に安住を与えた^{*4}」のではないかと記しています。その後住吉の安宅邸は終戦の二日前の空襲で焼けてしまい、彌吉は京都の平野神社近くの家に移り、そこで一九四九年二月に七七歳で亡くなります。

ことなく、各々その志す所に随うて就職せしむる仕組みなり^{*5}。

ここには育英事業を、たんに富豪の社会的貢献として義務的に捉えるのではなくて、自分の体験から生まれた理想主義的な構えを感じることができます。と同時に、「自分は極めて微力なる者なれども、社会に必要な人物たる訳なれば、其処に自分生存の大なる意義を生じ、一生を醉生夢死に終わらしめざることを得て、自ら人知れざる慰安となり得る所なり」と述べていて、人のためになすことが自分のためになるという自然で大らかなやさしさも窺えます。

この社会的奉仕への思いは一時的なものではなく、ずっと継続しています。一九四三年に病気で倒れた後に『備忘録』で、「志したこと十ノ一も達成しないで人生を終わるような気がして、まだ育英なり、社会事業方面に幾分のことをしたいものだ」と心残りがあるの「である」といい、また「学資を出してあげ

四 社会的奉仕としての育英事業と学園設立

彌吉が甲南高等女学校の設立の中心となり、しかも設立後、病気で引退するまで二六年間にわたって理事長など学園の経営責任者を務めたのはなぜなのでしょう。

ここには三つの要因が考えられます。一つは前に述べたように、自分たちの子どもの教育の場としての学校づくりという面です。自分たちが生みだしている新しい市民社会の価値観を大切にしたい学校を作りたい、という思いがあったのではないのでしょうか。この時期には、大正デモクラシーの風潮があり、デューイなどの体験を大切にす新しい教育への志向が強まるという背景もありました。そしてそれを受け入れるだけの土壌が甲南の生まれる阪神間にあったという事も彌吉たちの学校づくりを後押ししました^{*5}。

二つは、彌吉が、経済的に豊

ても貴方は何の義務も持ちません、ただ一つのお願いは善く正しき紳士になって下さる事、名高い人にならなくてもよい立派な学者になることはいりません。どんな職業を選ばれてもどんな生活をなさつても」と述べています^{*6}。このような願いを込めた社会的奉仕への思いが、甲南高等女学校の設立と運営にもうかがえます。

三つは、時代的な背景が考えられます。学園の設立を決めた一九一九年は第一次世界大戦が終結した次の年です。四年にわたる戦争中、疲弊する西欧にかわって日本は大戦景気に沸き、成金とはやされる金持ちが続出した時期でもあります。日露戦争中の一九〇四年に創業した安宅商会の場合も、需要の高まりとともに物価が急上昇して利潤を増やし、大戦勃発の一九一四年の資産が八〇万円であったのが、一九一八年の上期だけで一六〇万円の純益をあげています。財界では経済的な余裕が生まれて「富豪の社会的貢献」が問われることもあり、社会的奉仕への意欲を持っていた彌吉に

かな者の社会的義務として社会貢献を考えていたことです。このことについて、彼自身が『回顧録』の中で育英事業について詳しく述べています。彌吉は信仰心の厚い環境の中で生まれ育っており、自分の故郷の氏神（大野湊神社）や菩提寺（本龍寺）への寄進を続けていましたが、それだけではなく、江戸時代に貿易で財を成した同郷の銭屋五兵衛に「あこがれて都会に出て、何もない所から努力して事業を起し成功した者として、同じような思いを持った若者に対して援助をすること、社会奉仕をすることを当然のように感じていました」。

また、自分の次兄が商売を学ぼうと意欲をもって大阪に丁稚に行つたとき、あまりに厳しい待遇で栄養不良と脚気になって金石に帰ってきたことが念頭にあって、自分たちと同じような境遇にある人たちを助けたいという思いから育英事業と丁稚制度の改良をつなげて考えていました。

大阪の丁稚制度といえ
ば、（中略）今日といえども

とつても、それが可能な時代でもあったのです。

ただし、戦後の一九二〇年には揺り戻しとしての恐慌が起り、一九二三年には関東大震災による社会・経済の混乱が起っています。それでも彌吉の社会的奉仕の意思は揺らぐことなく、これ以後長く学園の経営にあたることになりました。

なお彌吉は、一九三七年から二年間大阪貿易学院（現・開明中学高等学校）の理事長も務めています。大阪貿易学院は、大阪商業会議所が外国との貿易に携わる人材育成のため英語・中国語・ロシア語の語学教育に重点を置く専修学校として設立したもので、商業会議所の会頭が理事長を務めていたのです。

五 彌吉と大拙

彌吉の社会的奉仕の考えは、「富豪の社会的貢献」として無理に頑張るといふよりは、彌吉にとつて人として自然な理想の実践ではなかったのかと思われまふ。それは、鈴木大拙がアメリカに渡つた一八九七（明治

まだ使用者本位の制度にして、被使用者の教育とか養成とかいうことに全く無關心なるのみならず、殊に保健上に関しては豪も注意を払われず。いうに忍びざる粗食をあてがい、酷待到らざるなく、もし地方中産階級以上の子弟にして大阪に出で、丁稚奉公より勤め上げんとするも、栄養不良と過度の勤勞のため、身体を害し、永年勤続する者ほとんどまれなり。（中略）今回いよいよ郷党子弟の教育に手を染むるや、併せて丁稚制度の改善をもこれに結びつけんがため、まずその方法として、丁稚はなるべく郷里より採用し、三か年だけ店の丁稚として使用し、この間実業補習の夜学に通わせて教育を授け、三年後には全然店を退かしめ、給費生とし甲種商業学校に入學せしめ、而して優等の成績を以て卒業せし者は、進んでこれを高等商業に入學せしめ、これら卒業生は自分に対して一切義務を負う

三〇）年のころから資金援助を続けていたことからもうかがえます。大拙は後に禅の思想を西欧に伝える仕事をした思想家ですが、一八九七年という彌吉はまだ二三歳、高商を卒業して日下部商店に入つて二年目でした。将来の独立を夢見て節約しながら資金をためている時代で、決してゆとりのある生活ではなかったにもかかわらず、その頃から一貫して支援を続けていたのです。

さて、彌吉の遺骨は鎌倉の東慶寺、故郷金石の本龍寺、西宮の海清寺の三ヶ所に分骨され、それぞれに墓が立てられています。が、このうち東慶寺は彌吉が高商の学生であった頃に禅修行のためによく通つた円覚寺の近くであり、鈴木大拙、西田幾多郎^{*8}たちの墓が並んでいます。その寺のなかに鈴木大拙が草した彌吉をたたえる石碑があります。

自分が今ここに君の遺徳をたたえようとするのは、我が国の文化・教育の面に尽くされた君の功績のゆえ

である。君はこのために財を惜しまなかった。(中略)自分が研究生活に専念しえたのも君の好意によるところ大であった。欧米国民が禅思想および東洋的物の見方を理解するために、自分の英文の著作が、いくらかなりとも役立つものがあつたとすれば、それはひとえに、君の精神的物質的支援のためものである。

援助された大拙は、彌吉との交流を次のように述べています。^{※9}

私達はここ(久徴館)で、色々将来の希望や抱負などを語り合つたのですが、私と安宅君とはなんとなく仲が良くなつたのです。安宅君は「わしは郷土の錢屋五兵衛の志を継ぐのだ。日本は小さい島国で天然の資源に恵まれていない。この国を強大にするには、どうしても盛んに貿易をやらなければならぬ。わしは大いに商売をやる」と言う。私は(中略)何か学問の方をやるうと言う。それで安宅君は、

「学問をやれば貧乏するにちがいないから、わしが金を儲けたならば、君の好きなことを何でも助ける」と言つたのです。(中略)とにかく、安宅君との関係は、私達が二十歳前後の時から五十年です。五、六十年の友人仲間、あれくらいよくつき合った人は無いようです。

おわりに

甲南高等女学校の校舎は一九四五(昭和二〇)年六月五日の空襲で完全に焼失してしまつて、その復興資金を集めるのに、翌年七月二五日に魚崎小学校を借りて音楽会を開いています。ヨゼフ・ローゼンシュトゥックと巖本真理を招いたブラームストとベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタのコンサートでした。ローゼンシュトゥックといえは戦争中にドイツから逃れてきて、現在のNHK交響楽団を鍛えた世界的な指揮者として知られています。当時の第一級の音楽会が甲南女子の復興の目的で行われているのです。生徒たち

は街頭や駅に立つてこのチケットを売つたという話が記録されています(『創立五十周年記念誌』^{※10})。それでどれだけの資金が集まつたのかはわかりませんが、普通であれば招聘するだけでも多額な費用がかかるはずで、それが復興資金集めを目的としたコンサートだというのだから驚いてしまいます。この催しは彌吉の長男の英一の助力によつて実現しています。^{※11}そしてこの年に、安宅彌吉は甲南女子学園の理事長を引退しました。

以上、さまざまな面から安宅彌吉について見てきましたが、今日、甲南女子学園の中で彼の足跡はどのような形で残っているのでしょうか。中高の講堂があるので、安宅講堂と名づけられてはいませんが、学園の中では、ほとんど語られなくなつてきているように思えます。出身地の金沢では「金沢ふるさと偉人館」に「近代日本を支えた偉人たち」として彌吉の資料が常設展示されています。実業家として成功しただけでなく、育英事業に力を尽くし、鈴木大拙たちの学問を支えた人として顕彰されているの

です。

彌吉が生涯をかけて育て上げた安宅産業は、彌吉の死後十大商社といわれるまでに大きく成長しましたが、一九七七年になくなつてしまいました。^{※12}しかし、彼の創設した甲南女子学園は発展して一〇〇年を迎えました。私たちは本学園設立の功労者としての彌吉について記憶しておく必要があるのではないでしようか。

※1「財団法人甲南学園甲南高等女学校」が設立認可されたのは一九二二(大正一〇)年三月のことであつたが、当初の財団運営の様子を表は次のように述べている。

「財団の任務は本校を設立するにあつた。その他には何の事業も経営しない。本校一校のみの経営であるから仕事は抛金を募集し、本校の経営を援助すればよい。」

「(高等女学校)設立当時の財産は二十七万余円で、このうち二十万円を基本金とし、その金利と一般寄附金とで学校を経営したのであつた。」

「普通ならば授業料その他学校の収入は一度これを財団会計の収

入にして、学校は予算を組んでその支出は一々財団から受入れるのであるが、本校のはそうではなく、学校の会計はこれを特別会計と称し、財団とは全く切り離して

取支を自由にし、その不足分を財団から受入れる建前であつた。もっとも校舎の建設とか教職員退職金のような臨時の支出は全部財団の支出であつた。本校は生徒数が少ないから到底生徒の授業料や入学金等では経常費さえも賄えず。されば毎年財団から不足金を補つてもらつたのであつた。例えば昭和二年度経常費四万二千円、不足一万五千円でこの不足金を財団から受入れることになつた。(中略)毎年平均二万円程度ずつの補助になつていたのであつた。」

基本金は文部大臣の認可を経なければ使えなかつたというから、毎年平均二万円の「特別会計」の補助の多くを彌吉が何とかしていたのは間違いないだろう。ちなみに財団は、一九四八年に名称変更して「財団法人甲南女子学園」となつている。

※2「備忘録」下p.391 この年、彌吉は日本商工会議所副会頭に就いてた。

※3彌吉の人生について、彼自身が書いたものとしては自伝的な「回顧録」(一九四四年)下(一九四六年)がある。ほかに安宅産業が崩壊した

一九七七年以降に書かれた、邦光史郎「安宅一族」(サンケイ出版)や網湖昭三「安宅弥吉」(日本の商人7国際商戦の先駆)(TBSブリタニカ)などいくつかのものがあるが、概ね彌吉による二つの本をよりにどこかにしているように思える。また森清「大拙と幾多郎」(岩波現代文庫)は、彌吉と鈴木大拙、西田幾多郎たちの友情と交流を描いていて彌吉のパーソナリティがよくわかる。

※4古田紹欽「安宅自安居士を偲ぶ」(鈴木大拙全集26巻)月報

※5竹村民郎は、「阪神間モダニズムの社会的基調」(関西モダニズム再考)(思文閣出版)の中で「甲南高等女学校創設のころ」について、本校を「阪神間の学校」のシンボルとして紹介している。

※6「回顧録」246

※7安宅彌吉についての講演会が、二〇〇八年に金石で開かれている。そこで安宅奨学生の集まりである一樹会の人たちが「安宅彌吉との

思い出」について語っていた。その話は彌吉が眼前に浮かぶような思い出話であり、大変興味をひかれた。安宅奨学生というのは、故郷の金石小学校を卒業した優秀な子どもを毎年三人ほど学校から推薦してもらい、大阪と東京の安宅商会で三年間ほど丁稚のような仕事で預かり、見込みのある子に奨学金を出して中学にやつたという

ものだ。月二十六円で生活するに十分な額であつたという。その奨学金で学校を卒業した後は、安宅商會に入つても、故郷に戻つても構わないというものであつたようだ。卒業するときには、「盆、暮れには中元や歳暮はいらない。どうしてもというのであれば米を送れ」と言つたらしい。丁稚として預かつた子どもたちの食糧ということのようだ。阪神大水害のときは、彌吉の住吉の家が砂に埋まつて、一年以上大阪に逃れてきて私たちと一緒に暮らすことになりました、と楽しそうに語っていた。「恩着せがましいことはいわない、素晴らしい、偉い人だった」という話は実感のこもつたものであつた。

※8西田は大拙と同じく第四高等学校の先輩にあたり、彌吉は、大

拙を通して一時経済的な援助をしている。

森清「大拙と幾多郎」p.236

※9赤松彬「鈴木大拙さんと安宅弥吉翁のこと」(鈴木大拙全集第15巻)月報岩波書店

※10「創立五十周年記念誌」p.11には「ブラームスの協奏曲イ長調ペー トーベンの協奏曲二番、二長調などプログラムに見える。」と書かれているが、「協奏曲」は「奏鳴曲」の誤植ではないかと推測される。

※11安宅英一については伊藤郁太郎「安宅コレクション余聞 美の猟犬」(日本経済新聞出版社)。

※12NHK取材班「ある総合商社の挫折」(現代教養文庫)、日経新聞「崩壊ドキュメント安宅産業」(日本経済新聞社)、松本清張「空の城」(文藝春秋社)など。

*名前の表記について。「創立五十周年記念誌」や、彌吉に関する書籍では「弥吉」の表記が多いが、自身の著した『回顧録』『備忘録』では「彌吉」となつており、本文の地の文では「彌吉」とした。引用の場合はその原文の表記をそのまま使つたので「弥吉」となつている場合がある。

第二節 安宅彌吉の遺産(抄録) 安宅彌吉の孫 工学博士(東京大学) 安宅光雄

序 彌吉の生涯の誇り

安宅彌吉は六〇歳に達した一九三三年、生涯を振り返った文章を書いています。

そこでは「自分は生まれてきて無駄ではなかった、いま死んだとしても、この世に生まれたことを感謝しながら死ぬると思う」と言い、その根拠として、自分が他人のために尽くすことができた例を三つ挙げています。すなわち(一) 給費生制度を作り、郷里である金石出身で小学校の成績が優秀であった者の進学を助け郷土に幾分かでも恩返しした、(二) 学校の世話をしている、(三) 友人を助けて大乘仏教を西洋に伝えることに努力しつつある、の三つです。

このうち(二)の「学校の世話」は甲南高等女学校の創設と運営を念頭に置き、(三)は鈴木大拙氏への支援を指しています。七一歳になって出版した『備忘録二』でこの文が読めます(P7)。

した。ところが女学校設立にだけは積極的でなかったようです。その深い理由までは分かりませんが、住吉村に既にあった別の女学校のことを依頼されたという記録もあります。大学設立に至る遠大で困難な構想があったので自分の財力や精力が分散することを恐れたのかも知れません。一方で一九〇九年一月生まれの彌吉の長女・登美子は甲南尋常小学校に通っていました。一九二一年春に迫っていました。小学校は当時男女共学ですが甲南中学校に女子は入れません。彌吉には登美子の通う良い女学校が近くほしいという強い願いがあり、この願いを共有する他の住民たちもいました。もし平生がその気になりさえすれば、甲南高等女学校の創設に係わることは自然であり誰も反対しなかったでしょう。とこ



安宅彌吉・静子夫妻(奥)と、左から長女・登美子、次男・重雄、長男・英一。登美子が甲南高等女学校に入学した1921年前後に撮影。

自分の生涯に意味があったと彌吉に誇りをもたせた三つの事業は、彼が死んで七〇年を経た今日でも幸いにしてなお存続し成果を挙げ続けています。すなわち(一)の甲南高等女学校は甲南女子大学へと発展し創立一〇〇周年を祝うところ。 (二)の鈴木大拙氏による東西の橋渡しは、大拙自身が創設した鎌倉の松ヶ岡文庫に加え、金沢市に鈴木大拙館が開設され多くの内外の訪問者を集めています。 (三)の給費生は最終的に一五〇名に上り「一樹会」を結成されました。年齢的に最後の方が数名だけご存命の状態に至っていますが彌吉の墓や頌徳碑の維持に全員が寄与されました。

彌吉は「たいていの仕事は死んでしまえばすぐ忘れられる」としつつ、「何かその人ではなくてはならぬ仕事をせねばならぬ。世道や人心に益するところがなくてはならぬ。後に残る仕事をせねばならぬ。」と言います(P19)。また老いを感じ

ろがその役回りは彌吉のところに来ました。平生は彌吉が甲南学園に係わる端緒と学校経営の実務的経験を与えたのに続けて、高等女学校設立を単独で行うチャンスまで提供してくれたことになり。彌吉は甲南高等女学校設立を主唱して実行し、登美子はそこに入学・卒業します。理事会レベルの議論としては一九一八年六月三日の甲南中学校設立準備会で女学校併設も議題となりました。しかし「二兎を追って挫折する恐れを排除するため、まず中学校問題を先決し、その基礎が固まるのを待つ女学校問題に及ぶ」ことを決めています。つまり「後回し」と正式に決定した事実があるので。一九一九年四月、甲南中学校が開校し、平生は四月二七日、財力のあった久原房之助に報告しに行きました。この際、久原の質問に対し女学校設立には「経費として約三〇万円が必要」と答えています。具体的な計画やスケジュールを明言していません。これに対し安宅彌吉は甲南高等女学校創設を主唱し単独の努力と寄付呼びかけによりスピー

ると「この世に出てきた甲斐のある仕事を何とかして後に残りたいという心持が切なるに至った。」とも述べています(P52)。甲南高等女学校の創設を中心に、以下、彌吉に誇りと生きがいを与えた事業を紹介して行きます。

一 甲南高等女学校と安宅彌吉

一・一 甲南と安宅彌吉との係わり 彌吉を甲南と結びつけたのは平生鈺三郎です。彌吉は東京高等商業学校を卒業しており平生の後輩だったので自然な交流がありました。甲南学園は一九一二年財団法人として認可を受け、まず幼稚園と尋常小学校を運営します。平生を含む理事の多くは当時の兵庫県武庫郡(現在の神戸市東灘区)住吉村に拠点がある人たちで、彌吉もそうでした。が初めは参加していません。

『平生鈺三郎日記』一九一五年八月六日の条に、平生と彌吉との昼食後の話が甲南学園維持問題にド感をもつて一九二〇年には誕生に至らせています。併行して校舎の建設を進め一九二一年一月二七日には新築校舎落成を祝う有吉忠一兵庫県知事臨席のものとで式典が開かれました。彌吉は一九一九年に甲南高等女学校設立のため二万円を寄付し、翌年以降も社会貢献一般のために総額五万円ずつ毎年拠出していくことを期していました。『回顧録』(一九二二) p.250。周りに拠金を実行させた証拠として、筆者の亡父・重雄が五〇〇〇円を寄付したことへの一九二〇年六月付けの感謝状が残っています。発行しているのは理事会計監督である安宅彌吉で、その次が理事長の田邊貞吉の名前です。登美子への愛情という動機はあったにせよ「女子の高等教育

及び「彼はついに維持員の一人として最少の分担をなさんことを申告するに至った」と平生が書いています。平生の熱意ある取組みと勧誘説得の結果として、甲南に対する彌吉の認識や責任感が高まり、金銭的拠出を申し出たことの記録で関与を開始した日にちが正確に伝わります。三週間ぶりの降雨をもたらしした低気圧が去り大阪の最高気温が三二℃を越えた快晴の金曜日のことでした。

この後しばらく、彌吉は学校経営の様々な側面(財政・人事など)を実地に即し学んでいます。甲南中学校設立が課題となり彌吉は一九一八年に中学校設立基金三万円を拠出し翌年春の開校と共に理事の一員になり、学校経営とはいかに行うものかという経験を深めていきました。別稿の三宅先生の原稿を参照すると、三万円というのは現在の一億円以上に相当するようです。

一・二 甲南高等女学校の創設

平生鈺三郎は七年制中高一貫教育や大学設立まで含めた長期的展望をこの頃から提示し構想面で甲南学園をリードしていま

育という理想」と実行力との双方を彌吉が兼ね備えていたことは疑いないでしょう。この歴史の巡り合わせにより、甲南女子学園創立一〇〇周年に当たり、彌吉が唯一の創設者と見なされる荣誉に浴することとなっています。換言すれば甲南大学を含む甲南学園の創立一〇〇周年とは別にお祝いの理由が設立経緯の中にあるのです。甲南女子大学の独自性、独立性、特徴と云って良いかも知れません。

二 彌吉の側の事情

二・一 彌吉の財力事情

一九一四―一九一八年の第一次世界大戦により日本は未曾有の好景気に沸きました。運搬手段を提供する海運業を筆頭に、彌吉が従事していた貿易業も競争特需により欧米諸国から多大の収益を上げることができました。これが、甲南高等女学校創設を独力で行うことを可能にした彌吉の財力の背景です。彌吉は一九〇四年に個人商店を設立しており、収益は意のままに使える立場にありました。大企業

感謝状

甲南高等女学校設立の爲の基本金離出に対する感謝状。安宅重雄は彌吉の次男で当時満8歳なので、実際に自分で支出できたわけではない。しかし彌吉が周りに金を集めて回り基本金を作ったことが伝わる。

安宅重雄殿

甲南高等女学校 理事長 安宅彌吉 敬具
昭和九年六月廿日
甲南高等女学校 理事長 安宅彌吉 敬具
昭和九年六月廿日



北鎌倉 東慶寺にある「安宅彌吉夫妻之墓」。筆者の長男 昇と長女（現姓西村）真佑子を入れ2008年初夏に撮影。



金沢市の大野湊神社にある安宅彌吉翁頌徳碑。左の写真は表の面、右の写真は裏の面左下部。文章は鈴木大拙が1957年に書き、文の右上方には彌吉のレリーフがめ込まれている。2011年9月撮影。



東慶寺境内にある彌吉の頌徳碑。1966年に鈴木大拙の主唱により建立され大拙が文を作り「自安」を揮毫、円覚寺管長朝比奈宗源老師が文を揮毫された。

の組織でなかったゆえ行使できた自由度とも言えます。

彌吉は一九二二年に『回顧録』で商業的な成功のいきさつを述べそれを周囲に幅広く配りました。苦労や失敗や失意も多いが一段落をみた成功譚です。従来の彌吉像は、彌吉自身がそこに記した文章を他者が再構成した面が強いと思います。もちろん本人以上に事実を知っている者はいないので、事実を述べる企業史や経済史としてはそれで十分です。ただ商業以外への関心は彌吉自身でもまだ客観視できずおらず、甲南高等女学校開校のように進行中の事柄に向ける深い思いは言語化していません。ですから再構成する他者へは伝わりません。冒頭に記したように、それから一〇年以上あとに書き二〇年以上経って出版した文章では、事業の成功や金儲けの話はなく「生きてきて良かったと思うのは他人のために奉仕し社会貢献を行った思い出、三件である」と記すのです。

そのうちの二番目である「学校の世話」について具体的に言くと、甲南高等女学校の誕生が

理解を深めるとともに来館者自らが思索する場として利用すること」を目的としており、金沢を訪れる内外の観光客をひきつけ続けています。大拙の影響を受けたり作品中で使ったりしている文

学者には芥川龍之介、村上春樹、玄侑宗久、J・D・サリンジャーが含まれ、大拙に影響されたと言明している美術家に横尾忠則、音楽家にジョン・ケージと一柳慧がいます。すなわち大拙は著作・松ヶ岡文庫・鈴木大拙館を通して活発な影響を現代社会に与え続けていると言えます。

安宅彌吉が行った社会貢献には鈴木大拙の活動の意義を早くから認めて終生の友人として援助したことが含まれ、東慶寺の墓所には大拙夫妻と彌吉夫妻

一九二〇年、校舎落成が一九二一年です。平生鈺三郎によれば、彌吉が甲南学園に最初に私財を提供したのは一九一五年で

一九一八―一九一九年の甲南中学校にも金銭的に貢献しています。つまり時期的に、第一次世界大戦に起因する財産形成ができた一九一四―一九一八年と甲南への関与はほぼびったり重なります。資本蓄積が彌吉の手許にあつたわけではなく収入を右から左に費消した形です。それには社会貢献を熱心に説く平生鈺三郎のような先輩経営者が身近にいて彌吉にロールモデルを示してくれたことの恩恵も大きいでしょう。平生自身の言葉借りると一九一八年八月一八日の日記に「金銭はよく集めよく散じてこそ社会国家に効力あり。」「富豪はその存在が社会の公益をなしてこそ尊重すべけれ、然らずんばこれなきに如かず。」です。彌吉にとっては収入が目的とかその用途を熟考のうえ選択したというより、社会貢献のための具体的計画と大きな金額が分かっており、実業による儲けの追求はそのための手段となっていたように思

が隣同士の墓で眠っています。

二・三 彌吉の言葉

あと、彌吉の遺産に自身の語った言葉や講演録が含まれるでしょう。甲南高等女学校で理事長として語った卒業式告辞は第七、八、九、一〇、一七、一八回のもの（一九三二年春から一九四二年春まで）が記録に残っています。これらはどこまで今日の若者の心に響くか、参考になるか分からないので、文字として残っているものがあるという指摘にとどめて置きます。

本稿の内容全体に関係する点ですが、彌吉には年下で若い人たちに語りたいたいという意欲があります。学校での良い教育を支援し、家庭では細心かつ丁寧

われます。平生からの働きかけ以前に、彌吉が元々もっていた社会貢献への理解と志向については三宅広明先生が生い立ちや経験や理想主義ややさしさの面から好意的かつ周到に別に解説して下さっています。

二・二 彌吉のその他の財界活動と社会貢献活動

安宅彌吉は一九一七年に大阪商業会議所の会員になっており、この財界活動を継続して第二二代大阪商工会議所会頭（一九三五―四〇年）も務めました。また貴族院議員に選ばれ、関西財界出身で商工大臣に就任した同い年の小林一三に国会で答弁させたりもしています。もちろん主要な目的は大阪の商工業者が困っている問題を国政レベルで訴え解決を図ることにありました。

このほか、安宅彌吉は仏教学者・仏教哲学者である同郷の鈴木大拙と学生時代に知り合い大拙の生活と研究と著作出版活動を一九四九年に死ぬまで五〇年以上にわたって助けました。大拙が京都の大谷大学教授に就任するとベアトリス夫人らと住むた

な養育が望ましいと考えます。同時に大拙が目指したような東西の橋渡しとか英語での発信とか一流の目標やレベルも大事なことです。彌吉のこれらの関心と目標は、おそらく甲南女子大学や甲南女子中学校・高等学校が今日でも目指しておられるところと重なるのではないのでしょうか。

結語

彌吉の遺産

彌吉が創業した安宅商會は、安宅産業と名前を変えたが残念なことに事業につまずき消滅しました。もう四〇年余り昔の話です。そのことの影響で思わぬ苦労をさされたり迷惑を蒙ったりされた方々がたくさんおられると思います。

給費生の方々約一五〇名は幸いなことに金沢を中心に堅実な人生を送られました。甲南高等女学校は甲南女子大学および甲南女子中学校・高等学校として発展し創立一〇〇周年を祝い、優秀な卒業生と在学在校生の層および同窓会組織を有しています。鈴木大拙の名前は広く知られるようになり影響の及ぶ範囲も仏



鈴木大拙館の思索空間と水鏡の写真。鈴木大拙館提供。



鈴木大拙夫妻らのため、大谷大学のそばに彌吉が建てて提供した西洋館のファサード。大拙は1926年初春から1944年初めまでここを自宅とし数々の重要な著作を執筆した。この建物は現存し個人の住宅として使用され続けている。2019年撮影。

めの西洋館を近くに彌吉が建てて提供しました。その後の住まいであり研究拠点であった北鎌倉東慶寺境内の松ヶ岡文庫は彌吉らが第二次世界大戦の戦時中に建てたものです。大拙は禅をはじめとする仏教の考え方にいて英語で解説し、更に東洋思想を西洋人に知らせたいという大望のもとで紹介し、この点で東西の橋渡しという大きな役割を担うこととなりました。金沢経済同友会が金沢市に要望したことがきっかけで二〇一一年金沢市に鈴木大拙館が開設されました。この館は「大拙について

教にとどまらず文学・美術・音楽・哲学・思想・経営・茶道・華道・武道・料理などに広がっています。彌吉と妻静子（戸籍名奈良江）が訓育し芸術や音楽の素養を授けた長男・英一は独特の美意識に基づいて東洋陶磁のコレクションを形成し大阪市立東洋陶磁美術館の重要な基礎を与えました。

これらが現在まで残っている彌吉の遺産です。その中でも唯一の高等教育機関であり輩出した人材の数と質の点で圧倒的に重要な甲南女子学園の創立一〇〇周年を心からお祝いし、つぎの一〇〇年へ向けての歩みを祝福したいと存じます。



亡父・彌吉の墓に参る満73歳の長男・安宅英一。この墓は西宮市の海清寺にあり「自安居士」と刻まれていたが現在は無い。1974年1月4日撮影。



和服姿の安宅静子。志村ふくみさんの自伝「一色一生」に言及がある。